

ゆりかごえんだより

2019・10・1



3期(10~12月)のねらい 手を使ってつくりだす活動を中心に園生活を豊かにしよう

運動会が近づき、ホールで跳び箱の練習をしていた5歳児クラスのHくん、勢いあまっておでこを跳び箱にぶつけたそうで、「あの～、F先生がおしぼりで冷やしたら？」と、事務室にいた私に報告に来ました。同じクラスのMくんと共に、その時、本が開いていたおもちゃのカタログが目に入り、Hくんは痛さも忘れ、「わぁー、これすげー！」Mくんも「あ、これMの(行ったことのある)病院にあた！」と、鬼末的なおもちゃを指しながら、二人とも興奮気味に次々とページをめくっていました。

しばらくして、事務室に来た理由を思い出したのが、

M「あ、先生、遅い、と言うんじゃない？」

H「あ、そしたらウソつくか、冷やピタ貼、てましたって」

M「のどが渴いて水飲んでたから遅くなりました、と言うか」

二人とも状況に合ったウソを考えついたことに「さすが5歳児」と感心。ページをめくり二人でおもちゃの話でたいそう盛り上がりていましたが、そう長くは続きませんでした。

M「待って、もう3階(で運動会の練習)終わ、ちゃうんじゃない？」

H「わぁー大変だぁー急げー」と二人とも慌てて3階へと戻って、いきました。

運動会に向けての取り組みに気もちがしっかり向いているからこそ「ホント」に戻ってこれたのでしょう。

このエピソードを面白く感じるとともに、以前著名な保育研究者が「子どものウソ」について話してくれたことを思い出しました。子どもがウソをつくという行為を、否定的にとらえる親見や保育者が多く、当然の発達の姿なのになかなか実践として表に出てこないのだそうです。

先生の『3歳から6歳～保育・子育てと発達研究を糸吉ぶ』という著書には、次のように書かれています。

「5歳から小学校低学年は、ウソをつけるほどに子どもが成長したためにたわいもないけれど巧みなウソの出やすい年齢。犯罪やいじめ、非行などは糸吉ぶつかすいたわいもないもの。しかし、ウソをつかれた親見は愕然とする。ウソをつくのはいけなしいことと言いつけさせることは必要だが、必要以上に叱る必要はない。なぜならこの時期はウソが出やすい年齢であり、それは本当のやさしさを発揮することと裏表の関係にあるからだ。小学校半ばころになると、子どものもう一段の成長が、ウソとのつき合い方を子どもに教えてくれる」と。

この時期のウソをつく子どもの姿を悲観したり頭ごなしに叱る必要はないようです。子どもの姿を理解し、共感したうえでウソをつくのは良くないという価値観を示していくことが次の段階の育ちにつながるのかなと思いました。みなさんはどうお考えになりますか？

